第7章　夫餘と辰

1　夫餘

(1) 百済王と夫餘

百済王は夫餘の出である。『北史』に次のように書かれている。

> 百済之国、蓋韓之属也。出自索離国。（中略）至夫餘而王焉。（中略）王姓餘氏。（中略）魏延興二年、其王餘慶、始遣其冠軍将軍（中略）上表自通、云、「臣與高麗、源出夫餘。」　『北史』
>
> （訳）百済の国は韓の属なり。索離国より出る。（中略）夫餘に至り王となる。（中略）王の姓は餘氏。（中略）魏の延興二年（４７２年）、その王餘慶は始めてその冠軍将軍を遣わす。（中略）上表して自ら通じて云う、「臣は高句麗とともに源は夫餘より出る。」

百済王の姓は餘氏であり、高句麗と同じく夫餘の出であるという。百済王餘慶とは蓋鹵王（がいろおう）である。『三国史記』百済本紀にもこれに対応した文章がある。

> （蓋鹵王）十八年、遣使朝魏。上表曰、（中略）臣與高句麗、源出扶餘。　『三国史記』
>
> （訳）（蓋鹵王）十八年（４７２年）、魏に使いを遣わす。上表して曰う、（中略）臣は高句麗とともに源は扶餘より出る。

『北史』も『三国史記』も、百済王は夫餘の出であると書いている。

(2) 百済の始祖

『三国史記』百済本紀は百済の始祖について次のように書いている。

百済始祖温祚王。其父鄒牟。或云朱蒙。自北扶餘逃難。至卒本扶餘。扶餘王無子、只有三女子。見朱蒙、知非常人。以第二女妻之。未幾扶餘王薨。朱蒙嗣立。生二子。長曰沸流、次曰温祚。及朱蒙在北扶餘所生子来為太子。沸流、温祚恐為太子所不容。遂與烏干、馬黎等十臣南行。（中略）沸流欲居於海濱。十臣諫曰、惟此河南之地、北帯漢水、東據高丘、南望沃澤、西阻海。其天険地利。（中略）沸流不聴。分其民、帰彌鄒忽以居之。温祚都河南慰禮城。以十臣為輔翼。国號十濟。是前漢成帝鴻嘉三年也。 『三国史記』

（訳）百済の始祖は温祚王（おんそおう）である。その父は鄒牟（しゅむ）という。或は朱蒙（しゅもう）という。北扶餘より難を逃れて卒本扶餘に至る。扶餘王に男の子が無く、ただ三人の女子があった。朱蒙を見るに非常の人（並みの人ではない）であることがわかり、第二の女（娘）を朱蒙の妻とした。未だ幾ばくもしないうちに扶餘王は薨じた。朱蒙は王位を嗣いだ。二子が生まれた。長男を沸流といい、次男を温祚という。朱蒙が北扶餘に居たときに生れた子が来て太子となった。沸流と温祚は太子に受け入れられないだろうと恐れて、遂に烏干や馬黎等十臣をともない南へ行った。（中略）

沸流は海濱に居すことを欲した。十臣は諫めて曰う、惟（おも）うに（海濱の地より）此の河南の地は北に漢水を帯ており、東は高い丘に據り、南は沃澤を望み、西は海に阻まれています。其れ天の険、地の利です。（中略）しかし沸流は聴かずに其の民を分け、彌鄒忽に帰り、そこ（海濱）に居した。温祚は河南の慰禮城に都を定めた。十臣をもって輔翼（補佐）とし、国を十濟と号した。是れ前漢成帝の鴻嘉三年（前十八年）なり。

百済は前漢成帝の鴻嘉三年（前１８年）からはじまるという。百済の扶餘王は北夫餘から来て扶餘の王になったという。『北史』には百済王は「索離国より出る」とあり、『魏略』には高離国より出るとある。

> 旧志又言、昔北方有高離之国者、其王者侍婢有身、王欲殺之。（中略）後生子。（中略）名曰東明。（中略）東明因都王夫餘之地。
>
> 『魏略』
>
> （訳）旧志に又言う、昔、北方に高離国あり。その王の侍婢が身ごもった。王は殺そうとした。（中略）後に子を生んだ。（中略）名を東明という。（中略）東明は都を定め夫餘の地に王となった。

『三国史記』の北夫餘は索離国や高離国のことであろう。『三国史記』は（北）夫餘と書いているが、索離国や高離国は夫餘ではないと思われる。中国の史書はすべて「至夫餘而王」、「王夫餘之地」と書いており、他国から夫餘の地へ来て王になったと書いている。

(3) 夫餘の滅亡

夫餘は２８５年に亡びる。『晋書』に次のように書かれている。

> 至太康六年、為慕容廆所襲破、其王依慮自殺、子弟走保沃沮。
>
> 『晋書』
>
> （訳）太康六年（２８５年）、慕容廆に襲い破られる所となり、その王依慮は自殺す。子弟は走り沃沮に保つ。

夫餘は慕容廆に伐たれて亡び、王（依慮）は自殺し、子弟は沃沮へ逃げたという。慕容廆の本拠地は遼西である。遼西から攻められて夫餘は反対の東へ逃げている。

夫餘はその後４９４年頃まで細々と続くようであるが、実質は２８５年に亡びたと考えてよいであろう。

2　百済

(1) 百済のはじまり

『三国史記』百済本紀には、百済の始祖温祚王は前１８年に建国したとある。ところが『隋書』には百済の建国が次のように書かれている。

> 百済之先、出自高麗国。其王有一侍婢、忽懐孕。王欲殺之。（中略）後遂生一男。（中略）名曰東明。（中略）東明之後、有仇台者、篤於仁信、始立其国于帯方故地。漢遼東太守公孫度以女妻之。漸以昌盛、為東夷強国。初以百家濟海、因號百済。　『隋書』
>
> （訳）百済の先は高麗国より出る。その王に一人の侍婢あり。忽ち懐妊す。王はこれを殺そうとする。（中略）後に遂に一人の男子を生む。（中略）名を東明という。（中略）東明の後、仇台という者有り。仁・信に篤く、始めてその国を帯方の故地に立てる。漢の遼東太守公孫度は娘を以てこれに妻とす。漸くして盛栄となり、東夷の強国となる。初め百家が海を渡ってきたので国を百済という。

百済は高句麗より出るとある。始祖は東明である。高句麗と同じ始祖である。初め「百家」が海を「渡（済）」り、帯方の故地へ来て国を建てたので「百済」というとある。

公孫度が娘を仇台に嫁がせたので、百済は繁栄し、東夷の強国になったという。

公孫度は２０４年に死去しているから、百済の建国は２０４年より少し前であろう。

『三国史記』と『隋書』では百済の建国はまったく異なる。

	国名	始祖	建国年
『三国史記』	十済	温祚王	前１８年
『隋書』	百済	東明王	２００年頃

『三国史記』では国名は十済となっている。「以十臣為輔翼。国號十濟。」とある。十人の家臣を伴って新しい国を建てたので国名を十済というとある。これは『隋書』の記述を真似しているのではないだろうか。『隋書』には、「初以百家濟海、因號百済。」とある。百家が海を渡り、国を建てたので百済というとある。『三国史記』は『隋書』の「百」を「十」に変えただけではないだろうか。

『北史』の百済王は「臣與高麗、源出夫餘」とあるように、東明王の方は高句麗と夫餘の始祖である。ところが温祚王の方は高句麗の始祖ではない。『三国史記』は『北史』の記述に合わない。百済の建国は『隋書』の方が正しいと思われる。

(2) 夫餘の歴史

百済の蓋鹵王は「臣與高麗、源出夫餘」と述べている。上表文に書いているから百済王はそのように認識していたのであろう。百済の歴史は夫餘から調べるべきであろう。夫餘の歴史は『桓檀古記』に詳しい。

> 壬戌（高列加）五十七年四月八日、解慕漱降于熊心山、起兵。其先橐離国人也。癸亥五十八年、（中略）（高列加は）遂棄位入山、修道登仙。

於是五加共治国事六年。是先、宗室大解慕漱密與須臾約襲據故都白岳山称為天王郎。四境之内皆為聽命。於是封諸将陞須臾侯箕丕為番朝鮮王。往守上下雲障。蓋北夫餘之興始此。而高句麗乃解慕漱之生郷也。故亦称高句麗也。

『桓檀古記』

（訳）壬戌（前２３９年）、解慕漱は熊心山にやってきて兵を起こした。その先は橐離国人である。癸亥（前２３８年）、（中略）（高列加王は）遂いに位を棄て山に入り修道する。ここに於いて五加（五部族）は国事を共治すること六年。是れより先、宗室大解慕漱は密かに須臾（番朝鮮）と約束をして壇君の地を襲い、故都白岳山に據り、称して天王郎となる。四境の内は皆命令を聴くようになる。ここに於いて諸将を封じ、須臾侯箕丕を陞（すすめ）て番朝鮮王となす。往きて上下雲障を守らしむ。蓋し北夫餘の興りはこれより始まる。而して高句麗は乃ち解慕漱の生郷なり。故、亦高句麗と称す。

前２３９年に、解慕漱は熊心山にきて兵を起し、翌年には高列加王を追い出し、北夫餘を建国したとある。

解慕漱は橐離国人であるという。『北史』の索離国、『魏略』の高離国であろう。「橐離国人」とあるから、やはり夫餘人ではないと思われる。夫餘（熊心山）に来て、夫餘の王を追い出し、（北）夫餘の王になっている。

「解慕漱は密かに須臾（番朝鮮）と約束をして」とある。番朝鮮は箕子朝鮮の後裔であり、前２８４年に燕に追われて医巫閭山へ逃げてきた東胡（殷）である。この記事から夫餘は医巫閭山の近くにいたことがわかる。

丙午四十五年、燕盧綰判漢、入凶奴。其黨衛満求亡於我。帝不許。然帝以病、不能自断。番朝鮮王箕準多失機、遂拝衛満為博士、劃上下雲障、而封之。是歳冬帝崩。葬于熊心山東麓。太子慕漱離立。

丁未元年、番朝鮮王箕準（中略）為流賊敗亡入海而不還。

『桓檀古記』

（訳）丙午（解慕漱）四十五年（前１９５年）、燕の盧綰は漢に背き匈奴に入る。その黨の衛満は我（夫餘）に亡命してくることを求めた。帝は聞き入れない。然るに帝は病気であり、自ら断ることができない。番朝鮮王箕準は多く機を失い、遂に衛満を拝して博士となし、上下雲障を劃いて衛満に与えた。この歳の冬、帝は崩じた。熊心山の東麓に埋葬する。太子の慕漱離が立つ。
丁未（前１９４年）（慕漱離）元年、番朝鮮王箕準は（中略）流賊のために敗られ亡げて海に入り而して還えらず。

番朝鮮は衛満に伐たれて亡びるが、夫餘は鴨緑江の方へ逃げている。

戊申二年、帝遣上将延陀勃、設城柵於平壌、以備賊満。
『桓檀古記』
（訳）戊申（慕漱離）二年（前１９３年）、帝は上将延陀勃を遣わし、平壌に城柵を設け、以て賊満に備える。

また次のようにも書かれている。

辛酉元年、遣将討右渠不利。擢高辰守西鴨緑江。増強兵力設城柵能備右渠、有功。陞為高句麗侯。癸亥三年、右渠賊大挙入寇。我軍大敗海城以北五十里之地盡虜有。（中略）癸酉十三年、漢劉徹寇平那、滅右渠。仍欲置四郡、盛以兵四侵。於是高豆莫倡義起兵所至連破漢寇。（中略）甲午三十年、東明王高豆莫汗使人来告曰、我是天帝子将欲都之。……（中略）是月帝憂患成疾而崩。皇弟解夫婁立之。東明王以兵脅之不已。君臣頗難之。国相阿蘭弗奏曰、通河之濱迦葉之原有地土壌膏腴宜五穀。可都。遂勤王移都。是謂迦葉原夫餘、或云東夫餘。　『桓檀古記』

（訳）辛酉（高于婁）元年（前１２０年）、将を遣わし右渠を討つが利あらず。高辰を抜擢して西鴨緑江を守らす。兵力を増強し城柵を設け能く右渠に備えるに功有り。陞めて高句麗侯となす。癸亥三年（前１１８年）、右渠の賊が大挙して入寇す。我軍は大敗し海城以北五十里の地は盡く虜の有するところとなる。（中略）癸酉十三年（前１０８年）、漢の劉徹（武帝）は平那に侵略して右渠を滅ぼす。仍（しきり）に四郡を置かんと欲し、盛んに兵を以て四方を侵す。ここに於いて高豆莫は義を唱え兵を起し、至る所漢寇を連破す。（中略）甲午三十年（前８７年）、東明王高豆莫汗は人を使わし来りて告げて曰く、我は是れ天帝の子、将にここに都せんと欲す。……（中略）是月、帝（高于婁）は患を憂え病気になり而して崩ず。皇弟の解夫婁が立つ。東明王は兵を以て脅すことやまず。君臣は頗るこれを難ず。国相の阿蘭弗が奏して曰く、通河之濱の迦葉之原に土地があり、土壌は膏腴（肥えている）、五穀に宜しい。都とすべし。遂に王に勤め都を移す。是れを迦葉原夫餘という。或は東夫餘という。

前１２０年、夫餘は鴨緑江の北で右渠と戦うが大敗する。前１０８年には漢が右渠を伐ち、衛氏朝鮮は亡びる。漢は四郡を設置するために盛んに兵を出して侵略してくる。これに抵抗したのが東明王高豆莫汗である。東明王高豆莫汗は夫餘を追い出す。追われた夫餘は迦葉原へ逃げる。これを迦葉原夫餘、あるいは東夫餘という。

『桓檀古記』は続けて概略次のように書いている。

前８６年に皇弟の解夫婁は迦葉原へ逃げて迦葉原夫餘を建国するが、解夫婁には子供が無く、大石の下から見つけたという金色の蛙形をした金蛙が王位を継ぐ。甲戌（前４７年）金蛙が即位する。甲寅（前７年）金蛙薨る。乙卯（前６年）太子の帯素が立つ。

その後のことが次のように書かれている。

> 壬午二十八年二月、高句麗挙国来侵。王自率衆出戦。（中略）高句麗上将（中略）殺之。（中略）秋七月、王従弟謂国人曰先王身弑国亡。人民無所依。（中略）故都人民萬餘口投高句麗。高句麗封為王、安置椽那部。以其背絡文賜絡氏。後稍自立。自開原西北徙到白狼谷。又近燕之地。
>
> 『桓檀古記』
>
> （訳）壬午（帯素）二十八年（２２年）二月、高句麗は国を挙げて来り侵す。王は自ら衆を率いて出て戦う。（中略）高句麗の上将（中略）が王を殺す。（中略）秋七月、王の従弟は国人に曰く、先王は身を弑し国は亡ぶ。人民は依るところ無し。（中略）故都の人民萬餘口をもって高句麗に投降する。高句麗は封じて王となし、椽那部に安置す。その背に絡文があるので絡氏を賜う。後稍（やや）自立す。開原より西北に徙り白狼谷に到る。又燕の地に近し。

西暦２２年に迦葉原夫餘は高句麗に伐たれて亡びる。王の従弟は高句麗に投降して椽那部となり絡氏を賜わる。その後、暫くして自立し白狼谷に移るとある。白狼谷は「燕の地に近い」と書かれている。白狼谷とは白狼山の谷をいうのであろう。夫餘の一派が白狼山へ移っている。

(3) 百済と遼西

『三国志』に、夫餘は高句麗の北にあると書かれている。２８５年に慕容廆に伐たれるまでは夫餘は高句麗の北にあった。ところが『隋書』には２００年頃に「百家が海を渡って帯方に上陸して」百済国を建国したと書かれている。高句麗の北にあった夫餘が船に乗り、帯方（郡）へ来るのであれば朝鮮半島を東からぐるっと一周することになる。そのような航海をするだろうか。

帯方へ上陸するには渤海方面から来たと思われる。それに関連すると思われる百済関係の記事がある。

> 百済国。本與高麗俱在遼東之東千餘里。其後高麗略有遼東、百済略有遼西。百済所治、謂之晋平郡晋平縣。　　『宋書』百済伝
>
> （訳）百済国。本（もと）高麗（高句麗）と倶に遼東の東千餘里にあり。その後、高句麗は遼東を侵略して領土とし、百済は遼西を侵略して領土とした。百済の治する所は晋平郡晋平縣という。

百済は遼東郡の東千餘里にあったが、その後遼西を侵略して領土としたとある。その地は晋平郡晋平縣であるという。『梁書』にもほぼ同じようなことが書かれている。

> 百済者其先東夷。（中略）其国本與句麗在遼東之東。晋世、句麗既略有遼東。百済亦據有遼西、晋平二郡地矣。自置百済郡。
>
> 『梁書』百済伝
>
> （訳）百済はその先は東夷。（中略）その国は本（もと）高句麗と遼東の東にあり。晋の世、高句麗は既に遼東を略有し、百済も亦遼西と晋平の二郡の地を拠有す。自ら百済郡を置く。

『通典』にも「晋時、句麗既略有遼東。百済亦據有遼西、晋平二郡」とある。「遼西、晋平二郡」の（註）には「今柳城、北平之間」とある。

「柳城、北平」は、遼西と右北平であろう。魏の曹操が袁尚を伐つために右北平から柳城を目指して行く途中で白狼山に登り柳城を眺めようとして敵と遭遇したという。右北平は（右）北平であり、右北平には白狼山がある。白狼山から遼西の柳城が見える。百済が拠有していたという遼西、晋平二郡は「今の柳城、北平之間」とあるように白狼山の近くであろう。

(4) 百済の建国

『隋書』によると、百済の建国は百家が海を渡り、帯方の故地に上陸して国を建てたとある。海を渡り、帯方の故地に上陸するには渤海を通って来たと思われる。百済は夫餘が建国した国である。渤海方面に居た夫餘は白狼谷に居た夫餘ではないだろうか。前述の『桓檀古記』には次のように書かれている。

■ 通河之濱迦葉之原有地
■ 自開原西北徙到白狼谷。又近燕之地。　　『桓檀古記』

「通河の濱の迦葉原に土地が有る」と云い、迦葉原へ移る。そこから西北にある白狼谷へ移る。そのとき「開原より西北へ徙り白狼谷に到る」とある。「開原（かいげん）」は「迦葉原（かようげん）」のことであろう。

白狼山（谷）は開原の西北にあるという。しかも開原（迦葉原）は「通河之濱」と書かれており海岸である。白狼山を西北方面とする海岸は渤海沿岸である。迦葉原は渤海沿岸であろう。夫餘の人達は渤海沿岸から白狼山へ移っている。

『梁書』に「晋世、百済亦據有遼西、晋平二郡地矣。自置百済郡」とあるのは、迦葉原夫餘の人々がそこに移り住んだからであろう。ここが百済の故郷である。

図 69　迦葉原と晋平郡晋平縣

２００年頃、夫餘の百家がここから渤海沿岸に出て、海を渡り、帯方の故地へ来て、百済を建国したのである。

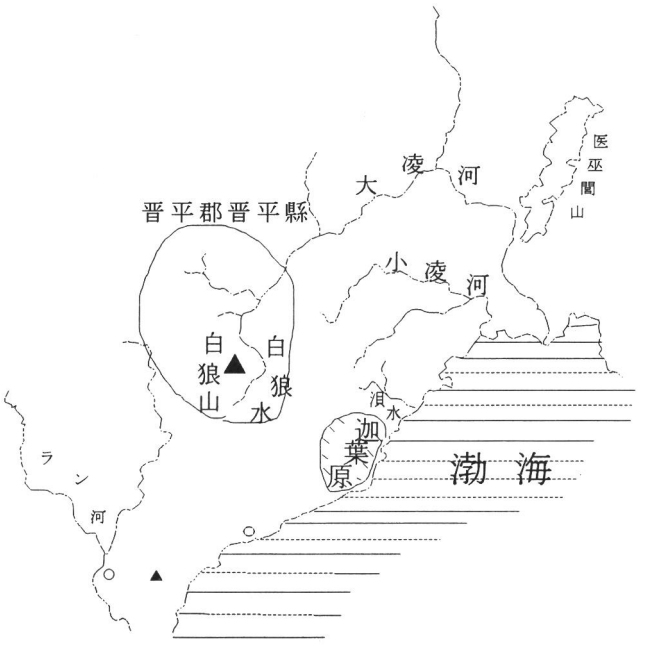

図 69　迦葉原と晋平郡晋平縣

3　辰

(1) 百済最後の太子

百済は６６０年に亡ぶ。『紀』に次のように書かれている。

> 或本云、至庚申年七月、百済遣使奏言、大唐・新羅并力伐我。既以義慈王、々后・太子為虜而去。　『日本書紀』斉明紀
> （訳）或本に云う、庚申年（６６０年）七月、百済は使いを遣わし奏して言う、大唐と新羅は力を併せて我を伐つ。既に義慈王、その后・太子を捕虜として連れ去る。

『旧唐書』にも次のように書かれている。

> 顕慶五年、命左衛大将軍蘇定方統兵討之、大破其国。虜義慈及太子隆、小王孝演、偽将五十八人等、送於京師。　『旧唐書』百済伝
> （訳）顕慶五年（６６０年）、左衛大将軍蘇定方に命じて兵を統べ百済を討ち、大いにその国を破る。義慈（王）及び太子隆、小王孝演、偽将五十八人等を捕虜にし、京師に送る。

太子隆は３年後の白村江の戦いでは唐の軍に加わり百済の残兵と戦っている。その後、熊津都督となり百済へ帰り、新羅と和親する。しかし唐の将軍等が帰国すると太子隆は新羅を懼（おそ）れて唐へ帰る。

> 時百済本地荒毀、漸為新羅所據、隆竟不敢還旧国而卒。（中略）百済之種遂絶。　『旧唐書』

（訳）時に百済の本地（本国）は荒廃し、新羅の據る所となる。隆は竟（つ）いに敢えて旧国（百済）に還らず。而して卒（死去）す。（中略）百済の種は遂いに絶える。

百済の太子隆は唐で死去する。太子隆の墓誌が洛陽から出土している。『謎の五世紀を探る』（読売新聞社）の中の特別講演「日本古代の騎馬民族国家」で江上波夫先生はその銘文を紹介しておられる。

公諱名は隆、字も隆、百済辰朝の人なり。　　（隆の墓誌）
（訳）公（太子隆）は諱名は隆、字（あざな）も隆、百済辰朝の人なり。

百済の蓋鹵王は４７２年に朝貢し、上表文に「臣與高麗、源出夫餘」と書いている。蓋鹵王は夫餘の出である。ところが百済最後の太子隆は辰の人であるという。辰は夫餘と同一なのであろうか。

(2) 辰国と楽浪郡

辰国について調べてみよう。辰国が中国の史書に現れるのは衛氏朝鮮の右渠の時からである。

伝子至孫右渠。所誘漢亡人滋多。又未嘗入見。真番・辰国欲上書見天子、又擁閼弗通。　　『漢書』
（訳）子に伝え孫の右渠に至る。誘われてくる漢の亡人は益々多くなる。又未だ嘗て入朝しない。真番・辰国が上書して天子に謁見しようとしてもこれを抑えて通さない。

真番や辰国が上書して天子に謁見したいと申し出ても右渠が通さないという。『漢書』のこの記事は『史記』から写したものと思われる。『史記』には次

のように書かれている。

伝子至孫右渠。所誘漢亡人滋多。又未嘗入見。真番旁衆国欲上書見天子、又擁閼不通。　『史記』

『史記』と『漢書』はほとんど同じ文章である。ただ違うのは『史記』では「真番旁衆国」となっているのが、『漢書』では「真番・辰国」になっている。旁衆国の中で辰国がもっとも大きな国だったからであろう。

次に中国の史書に辰国が出てくるのは『三国志』辰韓伝である。

a．辰韓者古之辰国也。
（訳）辰韓は古（いにしえ）の辰国なり。

b．辰韓在馬韓之東。其耆老伝世、自言古之亡人避秦役来適韓国。馬韓割其東界地與之。
（訳）辰韓は馬韓の東にあり。その耆老（古老）が代々伝えて云うところによると、自分たちは古の亡人であり、秦の労役を避けて韓国へやって来た。馬韓はその東界の地を割いて與（あた）えた。

c．其言語不與馬韓同、名国為邦、弓為弧、賊為寇、行酒為行觴。相呼皆為徒。有似秦人。
（訳）その言語は馬韓と同じではない。国を邦といい、弓を弧といい、賊を寇といい、行酒（杯をまわして呑むこと）を行觴という。互いに皆を徒と呼ぶ。秦人に似ているところがある。

d．名楽浪人為阿残。東方人名我為阿。謂楽浪人本其残餘人。
（訳）楽浪人を名付けて阿残という。東方の人は我のことを阿という。楽浪人は本（もと）その残餘の人であるという。

e．今有名之為秦韓者。
（訳）今、之（辰韓人）を名付けて秦韓という者あり。

『三国志』辰韓伝

aには「辰韓は古の辰国なり」とある。辰韓は辰国から生まれた国であるという。

dには「楽浪人を名付けて阿残という。東方の人は我（自分）のことを阿という」とあり、今楽浪にいる人々は我々の残りの人々であるから「阿残」というと書かれている。辰韓の人々は楽浪から来たのである。『北史』にも同じようなことが書かれている。

> 新羅者其先本辰韓種也。地在高麗東南、居漢時楽浪地。　　『北史』
> （訳）新羅はその先はもと辰韓の種族である。高句麗の東南にある。漢の時、楽浪の地に居た。

新羅は辰韓の種であり、漢の時代には楽浪に居たとある。『契丹古伝』にはその位置が書かれている。

> 辰以蓋馬大山為固、以奄淲大水為城、拒漢。　　『契丹古伝』
> （訳）辰は蓋馬大山を以て固めとなし、奄淲大水（鴨緑江）を以て城となし、漢を防ぐ。

辰は蓋馬大山と鴨緑江という自然の要塞に囲まれている。それによって漢の侵攻を防ぐとある。漢は鴨緑江の北側に位置しているから、辰は鴨緑江の南側にあることがわかる。鴨緑江と蓋馬大山の間にあるとあるから、蓋馬大山は鴨緑江の東南にある蓋馬高原のことであろう。

図 70　辰国と蓋馬大山

この地には当初は玄菟郡が置かれた。後に楽浪郡が置かれる。『三国志』東沃沮伝に次のように書かれている。

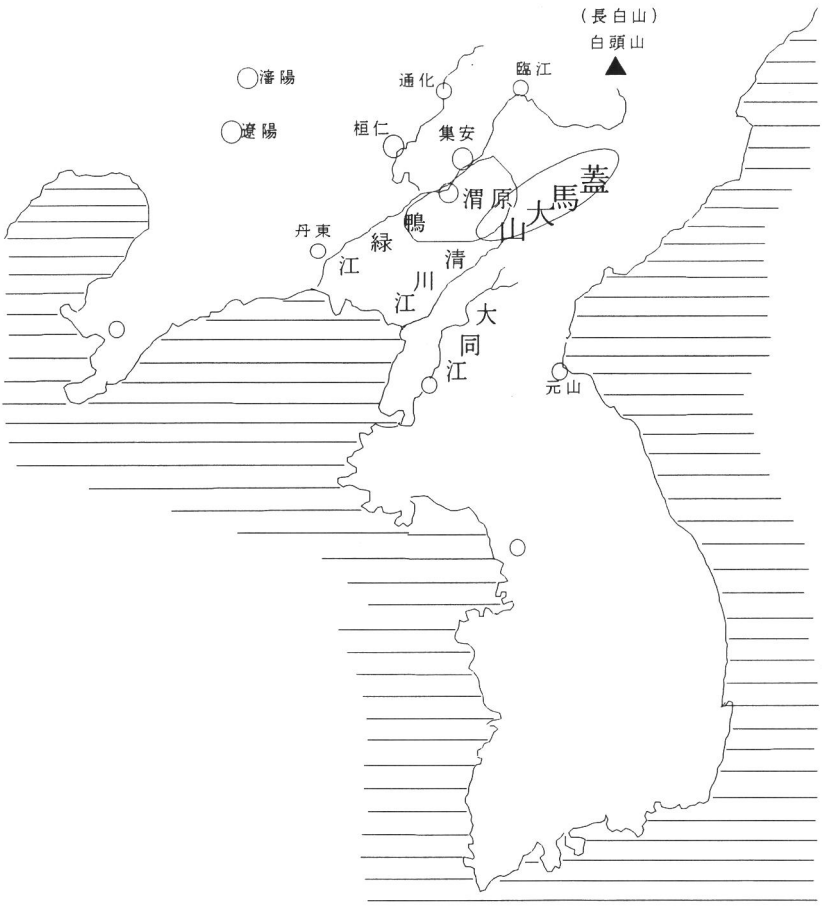

図 70　辰国と蓋馬大山

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東、濱大海而居。其地形東北狭、西南長。（中略）以沃沮城為玄菟郡。後為夷貊所侵、徙郡句麗西北。今所謂玄菟故府也。沃沮還属楽浪。　　『三国志』東沃沮伝

（訳）東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東に在り、大海に濱して居す。其の地形は東北に狭く、西南に長い。（中略）沃沮城に玄菟郡を置く。後、夷貊に侵されるところとなり、玄菟郡を高句麗の西北に移す。沃沮は楽浪に属すようになる。

東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東に在ると書かれている。辰は蓋馬大山の北に位置する。漢の武帝は衛氏朝鮮を伐って四郡を設置するが、沃沮には玄菟郡が置かれ、のちには楽浪郡となる。（「第２楽浪郡」）

玄菟郡が設置されるとき、辰は南へ逃げて辰韓となる。辰の地は楽浪郡になる。そこでその地に残っている人々を辰韓の人達は「阿残」というのである。

『北史』の「新羅者其先本辰韓種也。地在高麗東南、居漢時楽浪地」という記述とも一致する。

(3) 辰国と秦韓人

『三国志』は辰韓の言語について次のように述べている。

c．其言語不與馬韓同、名国為邦、弓為弧、賊為寇、行酒為行觴、相呼皆為徒。有似秦人。

（訳）辰韓の言語は馬韓と同じではない。国を邦といい、弓を弧といい、賊を寇といい、行酒を行觴といい、互いに皆を徒と呼ぶ。秦人の言葉に似ているところがある。

『後漢書』や『北史』にも次のように書かれている。

有似秦語、故或名之為秦韓。　『後漢書』

（訳）秦の言葉に似ているところがある。それ故辰韓をあるいは秦韓ともいう。

似秦人、故名之曰秦韓。　『北史』
（訳）秦人に似ている。それ故、之（辰韓）を名付けて秦韓という。

辰韓は辰国が樹立した国であるが秦人に似ているという。『契丹古伝』には、辰国に多くの秦人が逃げて来ていることを伝えている。

燕瞞説殷曰、請背水而国以禦漢寇。殷納封之姑郟宇。瞞又説漢曰、胡蔵秦華冑。請滅之、為郡、以絶後患。漢喜給之兵仗。瞞襲取殷。漢進郡、阻徐珂。殷王奔辰、秦氏随徒。殷亡。　『契丹古伝』
（訳）燕の瞞（衛満）は殷を説いて云う、水（川）を背にして以て国を漢の侵略から禦（ふせ）ぐことを請う。殷は瞞に姑郟宇の地を与えて住まわせた。瞞は今度は漢を説いて云う、胡は秦の華冑を蔵している。之を滅ぼし郡と為し、以て後患を絶つことを請う。漢は喜び瞞に兵器を与えた。瞞は殷を襲い取る。漢は郡を進め、徐珂を阻止する。殷王は辰に奔走し、秦氏も随う。殷は遂に亡ぶ。

殷（東胡＝番朝鮮）は衛満に伐たれて亡び、殷王は辰へ逃げる。秦氏（秦人）も随ったという。秦人も辰国へ逃げてきている。辰人と混血したであろう。そのために、秦人に似ているとか、秦の言葉に似ていると言われるのであろう。

(4) 辰国の遺跡

前１０８年に漢は衛氏朝鮮を伐つが、その直前に衛氏朝鮮からも人々は辰へ逃げてきている。『魏略』に次のように書かれている。

右渠未破時、朝鮮相歴谿卿以諫右渠、不用。東之辰国。時民随出居者二千餘戸。　『魏略』

（訳）右渠が未だ破られないとき、朝鮮の相（官名）である歴谿卿は右渠を諫めたが用いられなかった。そこで東の辰国へ行く（逃げる）。その時、民は随い、出居する者が二千餘戸あった。

辰国には衛氏朝鮮人も逃げてきている。辰には殷（東胡）人、秦人、衛氏朝鮮人（燕人）が逃げてきているのである。

その辰国の遺跡と思われるものが発掘されている。『朝鮮古文化綜鑑』（梅原末治、藤田亮策編著）（養徳社刊）に朝鮮半島の遺跡から出土した遺物が紹介されている。

□渭原龍淵洞　　（平安北道渭原郡崇正面龍淵洞）

鴨緑江の中流に当たる一支流渭原江の上流なる漢栢江に沿うた山間僻地にあって、鴨緑江本流を渭原旧邑洞から分岐して南十里の所にある。遺跡は本来直径十二尺の円形積石古墳と推定される。

○出土遺物

明刀銭	完成品　五一枚	刃部　二三九枚	
	把部　二五五枚	中部　二五〇枚	
銅製三角錐鏃	一個	銅製帯鉤	一個
鉄製鉾	二個	鉄製斧頭	二個
鉄製鍬頭	一個	鉄製鋤頭	一個
鉄製鎌	一個	鉄製包丁	一個
鉄製尖頭器	一個	鉄製鏃	一個
獣歯	一個		

○鉄器及び銅器が明刀銭と伴出した最も確実な例として学術的価値は極めて高い。

○明刀は燕の平明邑又は趙の新明邑の鋳造と見ること古泉家の常識である。

○明刀は燕・趙の領域内に最も多く遺存し、それと地域を接する熱河省・関東州・奉天省等からも少なからず発見例があり、朝鮮にあっても従来の発見例は鴨緑江支流の渭原江・禿魯江流域並びに清川江上流・大同江上流等の山間に限られ、ここに遼西・遼東を通じて是等の明刀が陸路に依る輸入である事綜説に述べた如く、山東からの海路による将来にあらざることを示している。

○銅製三角錐鏃…この種の三角錐鏃は楽浪郡の古墳・土城址からも多数発見され、鉄莖を遺存する例も珍しくなく、漢族通有の鏃と考えられる。

○鉄斧…この斧と同一のものが満州国熱河省欒平縣の遺跡から明刀銭と共に陶壺の中から発見されており、また同じ古泉の伴出する関東州貔子窩高麗寨遺跡からも多数に出土していて、時代の同時性を示しており、なお楽浪の古墳からも少なからず見出されて使用の漢代に及んだことをも察せしめるものがある。

□寧遠温陽里　　（平安南道寧遠郡温和面温陽里）

大同江上流の山間地帯で、四面山岳に囲まれた盆地の略中央部に当たる。大同江を遡る上流の交通不便な山間地である。

○出土遺物

明刀銭、布銭　　数百枚が重なり合って出土

□江界吉多洞　　（平安北道江界郡化京面吉多洞麻仙站）

鴨緑江に注ぐ禿魯江の中流の沿岸。渭原遺跡とは郡界の山嶺を越えると数里の所である。

○出土遺物

明刀銭　　四千枚以上　（五枚乃至六枚を束にして縛ってあった）

布銭

□江界仲岩洞　　（平安北道江界郡前川面仲岩洞）

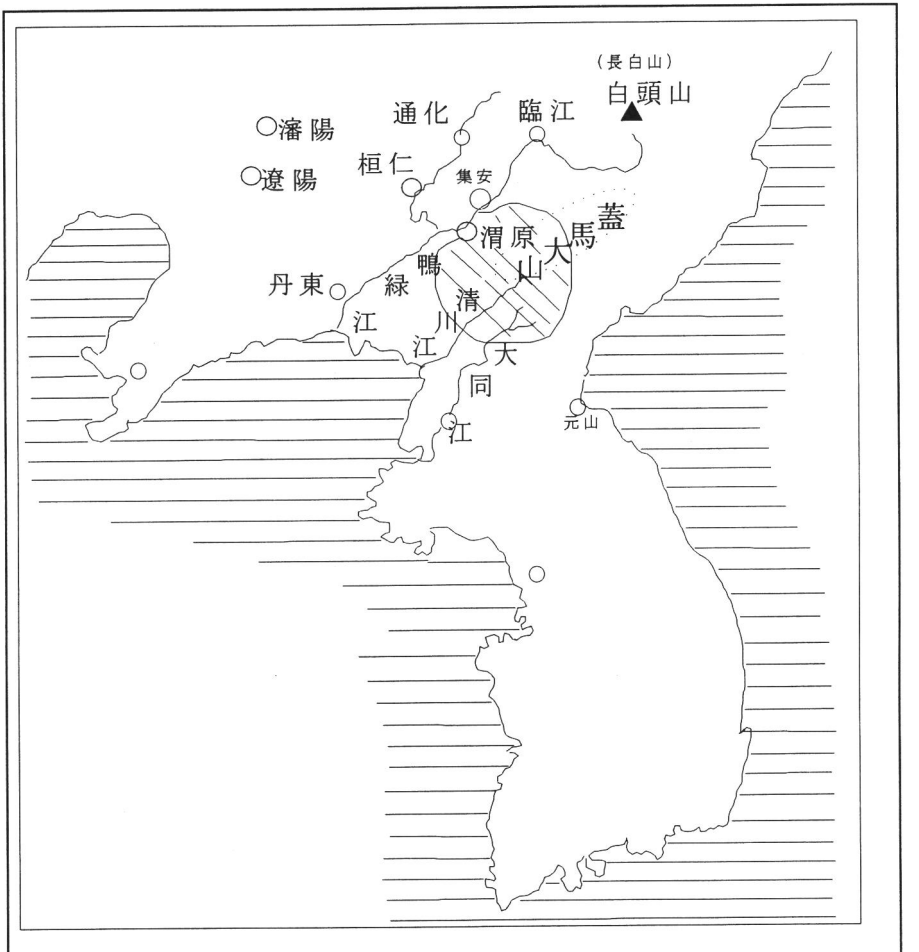

図 71　辰の遺跡

江界吉多洞とは禿魯江を隔てて僅かに二十町の谿谷にある。

○出土遺物

明刀銭

これらの遺跡の所在地の特徴について次のように述べている。

> 禿魯江からは峻嶺狗峴又は狄踰嶺を越えると清川江の上游に出ることが出来て、それは古来鴨緑江上流地方と平安道海岸地方とを結ぶ主要な交通路に当たっている。今日では文化の光に遠い山間に早くも先秦の貨幣のかくも多数埋蔵されていることは、当然右と連関するものであって、半島の最初の金属文化の流入がこの経路に依ったのを有力に物語るものであらねばならぬ。

鴨緑江中流域の南の山間地帯に多数の明刀銭や鉄器類を出土する遺跡がある。辰国があったところである。

辰には種々の人々が逃げてきている。燕の造った明刀銭が大量に出土するのも、燕が全盛の時にその支配下にあった人々が逃げてきているからであろう。あるいはまた燕人衛満が亡命してくるときに燕の明刀銭を大量に持ってきたのかもしれない。

図 71　辰の遺跡

4　辰王と月支国

(1) 辰王

『三国志』は辰王について次のように書いている。

a．辰王治月支国。

（訳）辰王は月支国に治す。（馬韓五十餘国の中に月支国がある）

b．弁辰亦十二国。（二十四国列挙）弁、辰韓合二十四国。其十二国属辰王。

（訳）弁辰は亦十二国。（中略）弁辰・辰韓合わせて二十四国。その十二国は辰王に属す。

c．辰王常用馬韓人作之。世世相継。辰王不得自立為王。

（註）『魏略』曰、明其為流移人。故為馬韓所制。

（訳）辰王は常に馬韓人を用いてこれを作る。世世相い継ぐ。辰王は自ら立って王になることはできない。

（註）『魏略』に曰く、明らかに其れは流移の人だからである。故に馬韓に制せられる所となる。

d．弁辰與辰韓雑居。亦有城郭。衣服居処與辰韓同。言語法俗相似。

（訳）弁辰は辰韓と雑居す。亦城郭有り。衣服や居処は辰韓と同じ。言語や法俗は相い似たり。　『三国志』

aには、辰王は月支国に治すとある。月支国は馬韓の中にある。辰韓は辰国が建国した国であり、ここにある辰王は辰国とは異なる国である。

ただし、弁辰・辰韓を合わせて二十四国の内、十二国は辰王に属すとあり、弁辰と辰韓は衣服・居所・言語・法俗が似ているとあるから、辰王も辰国（辰韓）も弁辰国も同じ辰人であろう。ルーツは同じであろうと思われる。

cには、辰王は常に馬韓人を用いてこれを作るとあり、その辰王は自ら立って王に為ることはできないと書かれている。この文章は難解であり、従来から謎とされてきた。多くの訳本では「辰王は馬韓人が為る」と訳している。筑摩書房の世界古典文学全集『三国志』（今鷹　真、小南　一郎、井波　律子訳）でも次のように訳している。

（訳）辰王の王位は、かって馬韓の者が即くことになって以来、代々ずっとそのままで来た。

筑摩書房『三国志』（今鷹、小南、井波訳）

「辰王の王位は馬韓の者が即く」と訳している。しかし『魏略』には「明らかに彼らは流移人であるから、馬韓によって制せられる所となる」と書かれている。流れて来たのは辰の人々である。馬韓人は先住民である。馬韓人が辰人を制しているのであり、それ故に辰人は自ら王になることが出来ないのである。馬韓人が辰人の中から辰王を決めているのである。ｃを訳すと次のようになる。

（訳）辰王は常に馬韓人を用いて（馬韓人によって）之（辰王）を作る（決める）。

辰王は常に馬韓人が決めていた。それが慣例になっていたのである。

(2) 月支国

辰王は月支国に治すとある。『桓檀古記』には月支国の建国が次のように書かれている。

丁未、番朝鮮王箕準（中略）為流賊所亡入海而不還。諸加之衆奉上将卓大挙登程、直到月支国。月支国卓之生郷也。是謂中馬韓。

『桓檀古記』

（訳）丁未（前１９４年）、番朝鮮王箕準は（中略）流賊（衛満）のために亡ぼされる所となり、海に入り而して還えらず。諸加（諸部族）の衆は上将の卓を奉（たてまつ）り、大挙して登程（出発）す。直ちに月支国に到る。月支国は卓の生れ故郷である。是れを中馬韓という。

前１９４年に衛満に伐たれて番朝鮮は亡びるが、その時上将の卓は諸部族に奉られて月支国へ逃げている。これが辰王になったのであろう。

『桓檀古記』には、月支国は卓の生まれ故郷であると書かれているが、『魏略』には「流移人」であるという。生まれ故郷に帰ってきた人を「流移人」とはいわ

ない。『三国志』には、「辰王常用馬韓人作之。世世相継」とある。「世世相継」とあるから前１９４年から世世続いてきたのではないだろうか。卓が月支国へ逃げてきて、その子孫が辰王になったのであろう。

番朝鮮が伐たれたときに逃げてきた人々が月支国で辰王になっている。番朝鮮の中に辰人が居たのであろう。

5　辰のルーツ

(1) 辰と東表

辰のルーツについて『契丹古伝』は次のように書いている。

> 蓋辰者古国上代悠遠也。伝曰神祖之後、有辰沄謨率氏。本與東表阿斯牟須氏為一。辰沄謨率氏有子、伯之裔為日馬辰沄氏、叔之裔為干霊辰沄氏。干霊岐為干来、二千隔海而望干来。又分為高令云。然有今不可得攷焉。其最顕者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。譲国於賁彌辰沄氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、撃退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又観兵亜府閭以掣漢。　　『契丹古伝』
>
> （訳）蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。伝えて曰く、神祖の後、辰沄謨率氏有り。本（もと）東表の阿斯牟須氏と同一なり。辰沄謨率氏に子有り。伯の後裔を日馬辰沄氏といい、叔の後裔を干霊辰沄氏という。干霊は岐（わか）れて干来となり、二千里海を隔てて而して干来を見ることができる。又分れて高令となるという。然るに今はそれを考えることができない。その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に

薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府閭に兵を観せ、以て漢を掣（ひきとど）む。

辰（辰沄謨率氏）は東表の阿斯牟須氏と同一であるという。東表とは中原から見て東の表（おもて）という意味であろう。東表は『春秋左氏伝』襄公三年（前５７０年）に次のように出てくる。

（魯国の）孟献子曰、以敝邑介在東表、……。　『春秋左氏伝』
（訳）孟献子曰く、弊邑（私どもの邑＝魯国）は東表に介在しているを以て、……。

魯国は東表にあるという。魯国は孔子の出た国であり、都は曲阜である。魯国を含む東方を東表という。

図 72　魯国と東表

辰はこの東表の阿斯牟須氏と同一であるという。辰のルーツは東表である。その一派が干霊であり、岐（わか）れて干来となり、二千里の海を隔てて居すとある。東表から（山東半島に沿い）対岸の遼東半島へ渡ったのであろう。又分れて高令となるという。高令はのちの高霊ではないだろうか。

(2) 辰と医巫閭山

貴彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきたとある。淮委氏と沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となるという。辰を淮委氏や沃委氏という種族が守っている。辰はこれらの種族の中心となる主要な民族であることがわかる。

辰の位置については『契丹古伝』の次の文章から推定することができる。

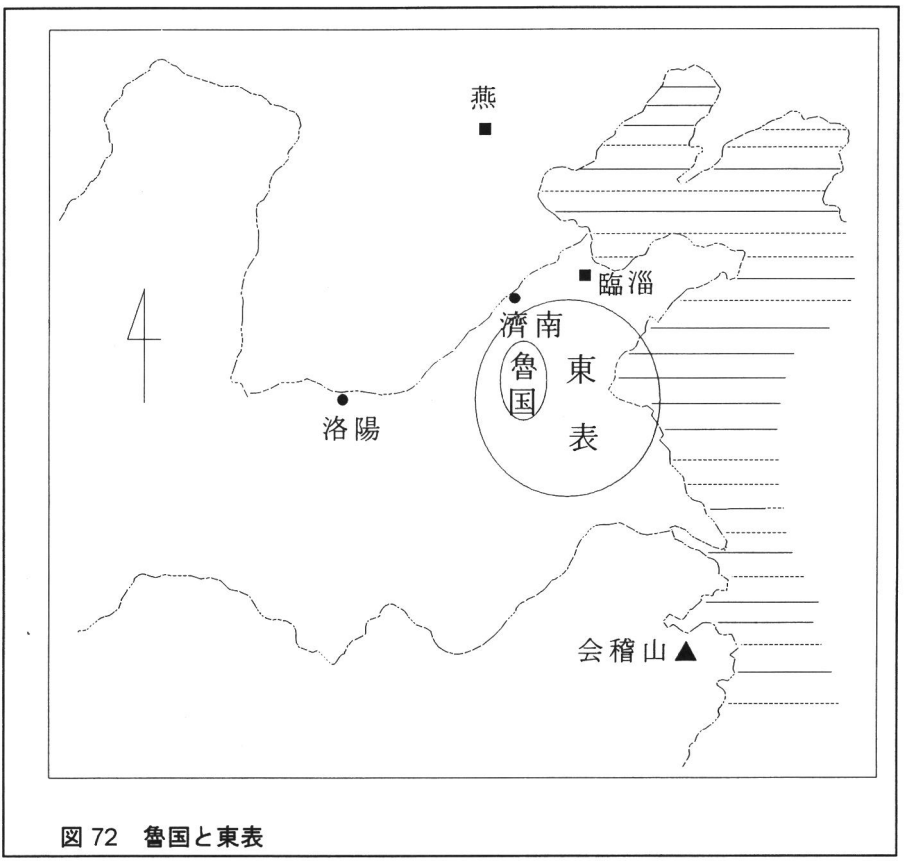

図 72　魯国と東表

於是殷大築味諏君徳。前孛斐礼水険、背介盟敦海岱、右踰薛葛、柵于撻牟毋、而為固、托脇於大辰之親。而為依以孛涘渤為外塹。

『契丹古伝』

（訳）ここに於いて殷は大いに味諏君徳（不明）を築く。前には孛斐礼水険、背には介盟敦の海岱、右は薛葛を踰え、撻牟毋を柵とし、而して固めとなす。大辰の親に脇を託し、而して依りとなす。孛涘渤を以て外塹となす。

殷（東胡）は燕に追われて大凌河と遼河の間（医巫閭山の近く）に逃げて孛浚渤大水（小凌河）をもって境界とした。殷はその時「大辰の親に脇を託した」とある。辰は大国であり、「大辰の親」と呼ばれている。殷は医巫閭山に来て、脇を辰に託しているとあるから辰も医巫閭山の近くにある。

「潘耶は又亜府閭に兵を観せ、以て漢を掣（ひきとど）む」とある。「亜府閭」は医巫閭山のことではないだろうか。亜府閭は「アフロ」と読めるが、これは漢音で読むからである。亜府閭を呉音と漢音で読むと次のようになる。

	呉音	漢音
亜	エ	ア
府	フ	フ
婁	ル	ロウ
亜府婁	エフル	アフロウ

亜府婁は呉音で読むと「エフル」である。「エ」音と「イ」音は音通であり、「ル」と「ロ」も音通である。

亜府婁＝エフル＝イフル＝イフロ（医巫閭山）

亜府婁は「イフロ」となる。「イフロ」は医巫閭山のことであろう。漢寇とは衛満が漢の手先となって医巫閭山の近くにあった真番朝鮮を伐ったときのことであろう。

辰は遼河下流域にあったと思われる。准委氏と沃委氏は嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となり、潘耶は医巫閭山に兵を集めて漢の侵攻を引き留めたのである。医巫閭山より先の遼河下流域にある辰を守っている。

(3) 辰の移動

前１９４年に殷は衛満に伐たれて辰へ逃げる。

> 燕瞞説殷曰、（中略）瞞襲取殷。漢進郡。阻徐珂。殷王奔辰、秦氏随徒。殷亡。　『契丹古伝』

衛満に伐たれて殷王は辰へ逃げ、殷は亡びる。辰はこの後、鴨緑江の南へ移り、辰国を建国する。それは滄海郡の事件の後である。滄海郡の事件については『漢書』に次のように書かれている。

- 元朔元年、東夷　君南閭等口二十八萬人降。為蒼海郡。　『漢書』
  （訳）元朔元年（前１２８年）東夷の薉君の南閭等は二十八萬人を連れて降る。そこを蒼海郡となす。
- 元朔三年、春、罷蒼海郡。　『漢書』
  （訳）元朔三年（前１２６年）春、蒼海郡を罷める。

『漢書』食貨志にも次のように書かれている。

> 彭呉穿穢・貊・朝鮮、置滄海郡。　『漢書』食貨志
> （訳）彭呉は穢・貊・朝鮮を打ち破り、滄海郡を置く。

ところが『史記』では不思議な記述になっている。

> 彭呉賈滅朝鮮、置滄海之郡。　『史記』
> （訳）彭呉は賈（あきない）をして朝鮮を滅ぼし、滄海郡を置く。

彭呉は商いをして朝鮮を滅ぼしたとある。彭呉は正当な方法で朝鮮を滅ぼしたのではなく、だまして朝鮮を滅ぼしたような書き方である。

『契丹古伝』にはこの事件が次のように書かれている。

> 於是瞞要漢反故。漢去但巫志心甚啣之。徐珂王淮骨令南閭峙欲為殷報讐、謀之於漢。漢誓不郡。許以王印為證。及洛兎出、南閭峙憤恚自刎。子淮骨令蔚祥峙襲破遼東、斬其守彭呉、率国合于潘耶。潘耶乃大焉。
>
> 『契丹古伝』

（訳）ここに於いて衛満は漢が故（もと）に反（返）ることを欲した。漢は但巫志を去るが心は甚だこれを啣（ふく）む（ねにもつの意）。徐珂王の淮骨令である南閭峙は殷の為に報讐せんことを欲す。漢とこれを謀る。漢は郡にしないことを誓う。許可するのに王印をもって證となす。洛兎（郡治か）を出るにおよび、南閭峙は憤慨して自ら首を切って死ぬ。子の淮骨令蔚祥峙は遼東を襲い破り、その（大）守である彭呉を斬り、国を率いて潘耶に合わせる。潘耶は大となる。

衛満は漢に対してもとの領域（浿水）まで郡を縮小するように要求している。『契丹古伝』には「漢進郡」とあるように、衛満が番朝鮮を伐ったとき、漢は郡（遼東郡）を浿水を越えて医巫閭山の付近まで拡大している。衛満はそれを自分の領土とするために漢にその土地を明け渡すように要求したのである。

衛満の要求に対して漢は仕方なく引き去るが、漢はそれを根に持っていたという。そこで南閭峙は衛満に伐たれて亡んだ殷の復讐をしようと思い、漢と謀り、衛氏朝鮮を伐とうとした。

ところが漢の代表者である彭呉は、南閭峙の領土を漢の郡にはしないという約束を破り、漢の郡（滄海郡）にした。それを知った南閭峙は憤慨して自ら首を切り死んだ。責任を取ったのであろう。『史記』に「賈（商いをして）」とあるのはこのことをいうのではないだろうか。『漢書』や『史記』には無い記述である。

南閭峙が自殺したあと、子の蔚祥峙は遼東郡を襲い、（太）守の彭呉を斬り、国を潘耶に合わせたという。これも『漢書』や『史記』には無い事件である。

『漢書』によると滄海郡はすぐに廃止される。それは（太）守の彭呉が伐たれたからではないだろうか。

この記事の後に『契丹古伝』は辰が鴨緑江の南に国を築いたと書いている。

> 於是辰以蓋馬大山為固、以奄淲大水為城、拒漢。　　『契丹古伝』
> （訳）ここに於いて、辰は蓋馬大山を以て固めとなし、奄淲大水（鴨緑江）を以て城となし、漢を拒ぐ。

滄海郡の事件（前１２８年）の後に、辰は鴨緑江の南へ移っている。朝鮮半島の辰国の誕生である。その後、さらに南へ移り辰韓となる。

(4) 辰国と辰王の移動ルート

辰には二つのルーツが考えられる。一つは辰王系である。東表から北へ廻り、碣石山へ行き番朝鮮と一緒になる。前２８４年に燕に追われて番朝鮮（殷）と共に医巫閭山へ逃げる。前１９４年に衛満に伐たれて月支国へ逃げて辰王となる。これが一つのルーツである。

この分派は弁辰国を形成する。「（弁辰）十二国は辰王に属す」とある。上将の卓が月支国へ逃げたとき、その他の人々は弁辰の地へ逃げたのであろう。辰王に属しているのはそのためであろうと思われる。

図 73　辰王の移動ルート

もう一つは辰国系である。東表から山東半島、遼東半島をつたって遼河の下流域に来て「大辰の親」と呼ばれたグループである。前１２８年に、漢は遼東半島に滄海郡を置く。追われた辰は鴨緑江の南へ移り、辰国を建国する。前１０８年に漢の武帝は衛氏朝鮮を伐ち四郡を設置する。このときさらに追われて南へ逃げて辰韓を建国する。『三国志』の「辰韓は古之辰国なり」とあるグループである。

図 74　辰国の移動ルート

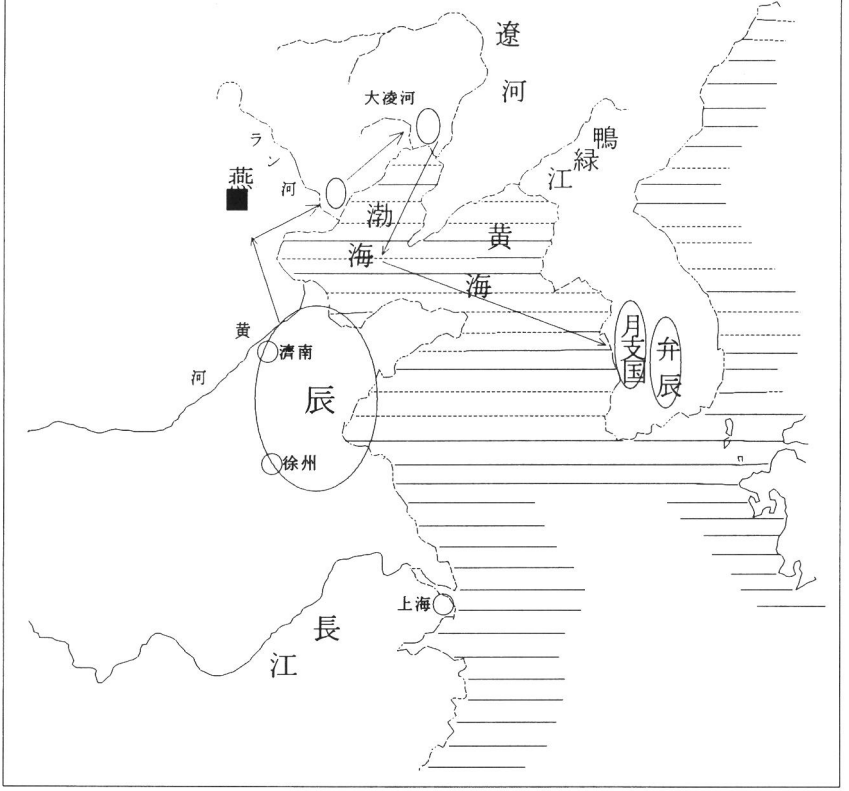

図 73　辰王の移動ルート

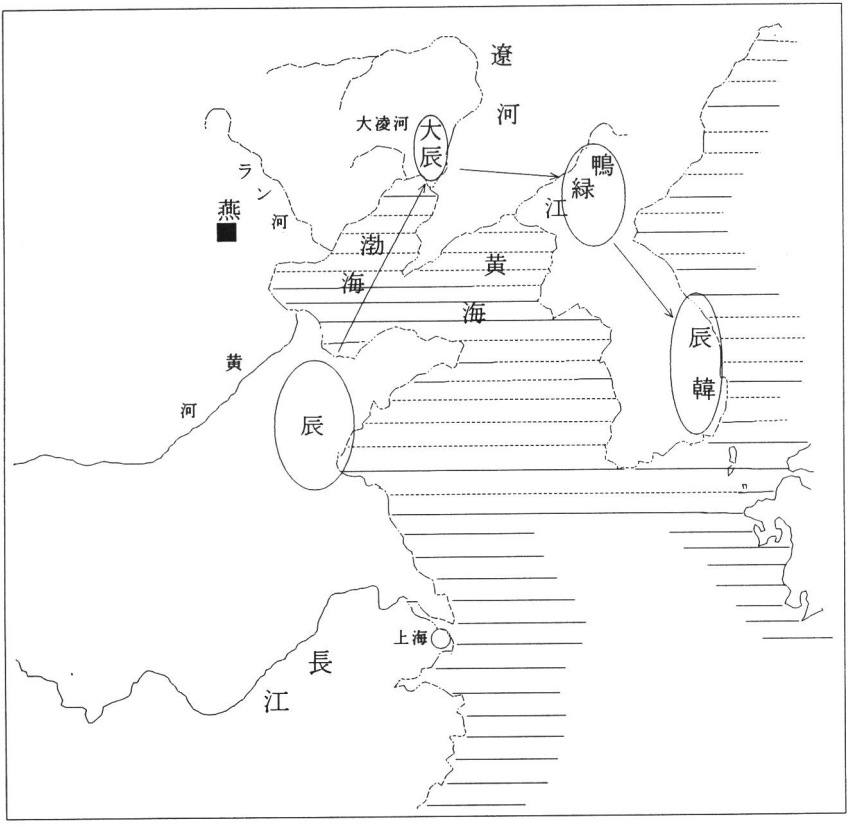

図 74　辰国の移動ルート

6　百済王統の交代

(1) 夫餘の別種

『旧唐書』百済伝の冒頭文は次のように書かれている。

百済国、本亦扶餘之別種。　『旧唐書』百済伝

「百済は夫餘の別種である」と書かれている。『三国志』や『後漢書』等に書かれている夫餘とは別の夫餘という意味であろう。

『廣韻』の「餘」をみると、その別種の夫餘と思われる記述がある。

風俗通云、呉公子夫概奔楚。其子在国、以夫餘為氏。今百済王夫餘氏也。
『廣韻』「餘」
（訳）風俗通に云う、呉の公子である夫概は楚に奔走した。その子に国ができた。そこで夫餘をもって氏とした。今の百済王夫餘氏なり。

夫概は呉の闔廬王の弟である。闔廬王が楚と戦っている間に呉へ還り、自ら呉王となった人物である。闔廬王は急遽呉国へ帰り夫概を討つと、夫概は楚へ逃げたという。『史記』に次のように書かれている。

十年春、攻夫概。夫概敗奔楚。　『史記』呉太伯
（訳）十年（前５０５年）春、夫概を攻める。夫概は敗れて楚へ奔る。

「風俗通」は『風俗通義』のことであり、後漢時代の応邵の撰である。応邵は当時最高の学者であり、応邵の説は『漢書』の（註）に盛んに用いられている。

■険涜…応邵曰朝鮮王満都也。

■番汗…応邵曰汗水出塞外西南入海
■沓氏…応邵曰沓水也。
■朝鮮…応邵曰武王封箕子於朝鮮。　　『漢書』地理志

応邵の説がこのように数多く採用されているのは応邵の説が正しいからであろう。その応邵が、呉の夫概の後裔は夫餘氏であると書いている。

『廣韻』は宋時代の景徳四年（１００７年）に編纂されているが、隋時代にできた『切韻』をもとにして作られているという。藤堂明保編『学研 漢和大字典』（学習研究社）の巻末に次のような解説がある。

> 韻書 『切韻』（六〇一年、隋の陸法言らの著）は、隋王朝が南北朝の分裂に終止符を打った頃に編纂された。（中略）漢語には固有の音素がなく、つねに声母＋韻母がくっついて字音を組み立てている。（中略）これを「反切法」という。（中略）この方法は、遠く後漢の末、応邵に始まると伝えられるが、六朝末期になると反切法を用いて古典の音義を注釈した『経典釈文』が作られ、発音字典としては『切韻』が編纂された。『切韻』は多くの写本となって唐代に伝わり、また『唐韻』とも名を改めた。（中略）北宋の初めには『廣韻』（一〇〇八年、勅撰）と改称して、（後略）

「反切法」は応邵が考え出したとある。応邵が如何にすばらしい学者であるかがわかる。

『廣韻』ができた北宋時代には百済は既に滅亡している。『廣韻』に「今百済王夫餘氏也」とあるのは『切韻』に書かれていた内容がそのまま写されているのであろう。『切韻』は隋時代（６０１年）の編纂であるから、百済の亡ぶ６０年前である。「今百済王夫餘氏也」とあるのはその当時の百済王のことであろうと思われる。

『隋書』によると、百済は５８２年に朝貢している。

開皇二年、高麗、百済并遣使貢方物。　『隋書』

（訳）開皇二年（５８２年）、高麗と百済は并び使いを遣わし方物を貢ぐ。

『隋書』百済伝にも次のように書かれている。

開皇初、其王餘昌遣使貢方物。拝昌為上開府・帯方郡公百済王。

『隋書』百済伝

（訳）開皇の初め、其の王餘昌は使いを遣わし方物を貢ぐ。昌を拝して上開府・帯方郡公百済王と為す。

百済は隋へ朝貢し、「上開府帯方郡公百済王」に徐せられている。この時、隋王朝は百済王の王統について詳しく尋ねているはずである。その結果が、６０１年編纂の『切韻』に「今百済王夫餘氏也」と書かれているのであろう。当時の百済王統は呉の夫概から出た夫餘氏である。

蓋鹵王は４７２年に朝貢し、「臣は高句麗とともに源は夫餘の出である」と述べている。これを「北方夫餘」と呼ぶことにし、『廣韻』に書かれている呉から出た夫餘を「南方夫餘」と呼ぶことにしよう。

蓋鹵王の４７２年の時点では百済王統は北方夫餘であった。ところが隋時代（最後の百済王統）は南方夫餘である。この間に百済王統は北方夫餘から南方夫餘に交代していると思われる。

『旧唐書』に「百済国、扶餘之別種」とあるのはこのことを述べているのではないだろうか。

(2) 南方夫餘氏

南方の呉から何故「夫餘氏」が生まれたのであろうか。それについての記録はないが、考えられることは次のようなことであろう。

『史記』の呉国をみると王名に「餘」の付く王が居る。

> 二十五年王寿夢卒。寿夢有子四人、長曰諸樊、次曰餘祭、次曰餘昧、次曰季札。　『史記』呉太伯
>
> （訳）二十五年（前５６１年）、王の寿夢が卒す。寿夢には四人の子が有り、長男を諸樊といい、次を餘祭といい、次を餘昧といい、次を季札という。

寿夢の長男は諸樊であり、その子が闔廬王である。夫概は闔廬王の弟であるから餘祭、餘昧は闔廬王および夫概の叔父にあたる。王位は、諸樊（前５６０－５４８年）、餘祭（前５４７－５３１年）、餘昧（前５３０－５２７年）と続く。「餘」の付く王が続いている。

夫餘の「夫」は夫概の「夫」であろう。また闔廬王の子も夫差であり「夫」が付く。呉には王名に「夫」や「餘」のつく人が多い。これらのことから「夫餘氏」が生まれたのではないだろうか。

(3) 蓋鹵王と文周王

蓋鹵王（餘慶）は４７２年に朝貢し、その上表文に「臣與高麗、源出夫餘」と書いている。ところが蓋鹵王は４７５年に高句麗に攻められて殺される。『紀』に次のような（註）がある。

> 百済記云、蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍来攻大城。七日七夜。王城降陥、遂失尉禮。国王及大后、王子等、皆没敵手。　『日本書紀』雄略紀

（訳）百済記に云う、蓋鹵王の乙卯年（４７５年）冬、狛（高句麗）の大軍が来て大城を攻めること七日七夜。王城は降陥し、遂に尉禮を失う。国王及び大后、王子等は皆敵の手に没す。

百済は高句麗に伐たれて、蓋鹵王、王后、王子等は皆殺されたとある。百済は亡んでいる。

その後の百済について『三国史記』は次のように伝えている。

文周王。蓋鹵王之子也。初毗有王薨。蓋鹵嗣位。文周輔之。位至上左平。蓋鹵在位二十一年高句麗来侵。圍城。蓋鹵嬰城自固。使文周求救於新羅。得兵一萬廻。麗兵雖退。城破王死。遂即位。　『三国史記』

（訳）文周王は蓋鹵王の子なり。初め毗有王が薨る。蓋鹵が位を嗣ぐ。文周はこれを輔（たす）ける。位は上左平に至る。蓋鹵王の在位二十一年（４７５年）高句麗が来て侵す。城を圍む。蓋鹵王は嬰城（籠城）して固く守り、文周を使わし新羅に救援を求めさす。兵一萬を得て廻（かえ）る。麗（高句麗）の兵は退いたけれども城は破れ王は死んだ。遂に即位す。

蓋鹵王が殺された後、文周王が即位している。文周王は「蓋鹵王之子也」とある。『三国史記』による百済の王統は次のようになっている。

十九代毗有王…二十代蓋鹵王（長男）…二十一代文周王（子）…二十二代三斤王（長男）…二十三代東城王（牟大）（文周王の弟昆支の子）

系図にすると次のようになる。

図 75『三国史記』による百済王統の系図

十九代毗有王から二十二代三斤王までは直系の子が王位を継承している。二十三代の東城王（牟大）は文周王の弟昆支の子であるという。

ところが『紀』には次のような（註）がある。

汶洲王蓋鹵王母弟也。　　『日本書紀』雄略紀

（訳）汶洲王（文周王）は蓋鹵王の母の弟なり。

文周王は蓋鹵王の子供ではなく、蓋鹵王の母の弟であるという。文周王は蓋鹵王の叔父にあたることになる。

『南齊書』にも『三国史記』の系図と合わない記述がある。東城王（牟大）は南齊に朝貢して鎮東大将軍に除せられ、これを喜び次のようなことをしている。

鎮東大将軍百済王牟大、今以大襲亡祖父牟都為百済王。　　『南齊書』

（訳）鎮東大将軍百済王牟大（東城王）は、今大いに襲い亡き祖父牟都を以て百済王となす。

百済王牟大（東城王）は鎮東大将軍になったことを大いに喜び、すでに死去している祖父の牟都を百済王に追諡（ついし）している。

『三国史記』によると、牟大（東城王）は文周王の弟昆支の子であるから、牟大の祖父は文周王と昆支の父である蓋鹵王ということになる。「図75『三国史記』による百済王統の系図」参照

しかし蓋鹵王は牟都ではない。しかも蓋鹵王は百済王になっているから百済王を追諡する必要はない。『三国史記』の王統は『南齊書』の記述と合わない。

『紀』の（註）には「汶洲王（文周王）は蓋鹵王の母の弟である」と書かれている。昆支は文周王の弟であるから、蓋鹵王の母と文周王と昆支は兄弟である。牟大（東城王）は昆支の子であるから、祖父牟都はこの三人の父ということになる。系図にすると次のようになる。

図76　牟大の系図

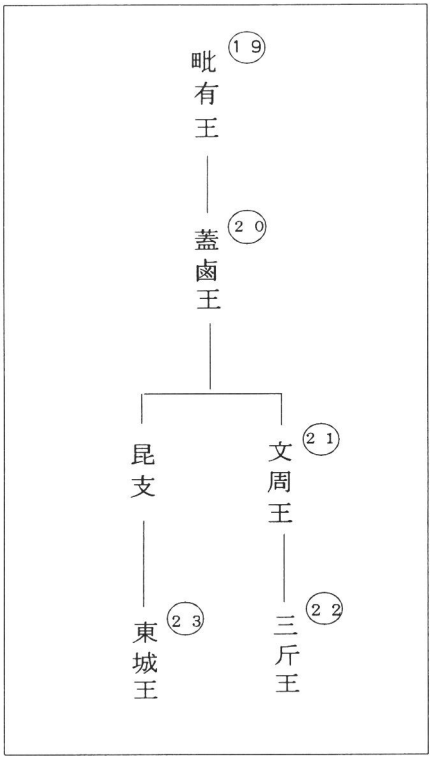

図 75『三国史記』による百済王統の系図

『紀』の（註）にある「汶洲王（文周王）は蓋鹵王の母の弟なり」という記述は『南齊書』の「祖父牟都を百済王となす」という記述と合致する。百済の王統は『紀』の（註）や『南齊書』の方が正しいということになる。『三国史記』の「文周王は蓋鹵王の子也」は誤りである。

(4) 牟都と南方夫餘

百済はその後も中国王朝に朝貢するが、その後は王統を偽っている。『梁書』には百済の王統が次のように書かれている。

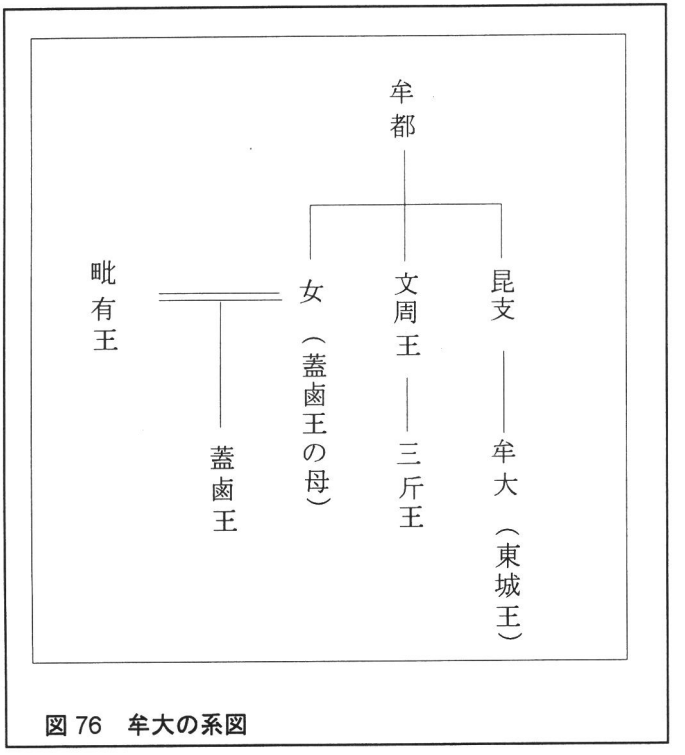

図 76　牟大の系図

餘毗死、立子慶。慶死、子牟都立。都死、立子牟太。　『梁書』

（訳）餘毗死す。子の慶（蓋鹵王）立つ。慶死す。子の牟都立つ。都死す。子の牟太立つ。

慶（蓋鹵王）が死去すると子の牟都が王位についたと書かれている。牟都は死後に百済王を追諡された人物であり、百済王になったことはない。それにもかかわらず『梁書』には正式に牟都は百済王であると書かれている。

この王統は牟都が重視されている。牟都を重視して百済王に追諡したのは牟大である。この王統は牟大が意図したとおりになっているといえる。牟大にとって牟都は重要な意味を持つ人物だったからであろう。

蓋鹵王は高句麗に伐たれて殺され、王后も、王子も皆殺されている。百済は亡んでいる。蓋鹵王の王統は絶えている。この時、百済王統は北方夫餘から南方夫餘へ変わったのではないだろうか。蓋鹵王が殺されて百済王を継いだのは文周王である。文周王は牟都の子である。牟都が文周王を王位につけたのではないだろうか。

牟都は娘を毗有王に嫁がせている。百済王の外臣になっている。百済王の義理の父である。牟都はこの時から力を得たのであろう。４７５年に蓋鹵王が高句麗に殺されて百済王統が絶えると、牟都は都を南の熊津（現在の公州）に移し、息子の文周を百済王にしたのではないだろうか。百済王統はこの時点から南方夫餘に変わったのである。

文周王の次に即位したのが牟大である。牟大は祖父（牟都）の功績を称えて牟都に百済王を追諡したのであろう。『旧唐書』に「百済は夫餘の別種」とあるのは、唐時代の百済が北方夫餘とは別種の南方夫餘であるということを述べているのであろう。

(5) 武寧王

牟大の後の百済王統は安泰だったのであろうか。検討しなければならないのは武寧王である。武寧王について『紀』は次のように伝えている。

> （雄略）五年四月、百済加須利君（蓋鹵王也）（中略）乃告其弟軍君（昆支也）曰、汝宜往日本以事天皇。（中略）加須利君則以孕婦嫁與軍君曰、我之孕婦既當産月。（中略）六月、孕婦果如加須利君言、於筑紫各羅嶋産児。仍名此児曰嶋君。（中略）是為武寧王。　『日本書紀』雄略紀

（訳）雄略五年（４６１年）四月、百済の加須利君（蓋鹵王なり）（中略）乃ち其弟軍君（昆支）に告げて曰く、汝、宜しく日本へ往き、以て天皇に仕えよ。（中略）加須利君は則ち孕める婦人を軍君に嫁がせ与えて曰く、我の孕める婦人は既に産月に当たれり。（中略）六月、孕める婦人果して加須利君の言う如く、筑紫の各羅嶋に於いて児を産む。仍ち此の児を名付けて嶋君という。（中略）是れ武寧王なり。

これには次のような割注がある。

（註）百済新撰云、辛丑年、蓋鹵王遣弟昆支君、向大倭、侍天王。以脩兄王之好也。　『日本書紀』雄略紀
（訳）「百済新撰」に云う、辛丑年（４６１年）、蓋鹵王は弟の昆支君を遣わし、大倭に向かわせ、天王に仕えさす。以て兄王の好（よしみ）を脩めるなり。

この続きが『武烈紀』に書かれている。

四年（是歳）、百済末多王無道。暴虐百姓。国人遂除、而立嶋王。是為武寧王。（註）百済新撰云、末多王無道、暴虐百姓。国人共除。
武寧王立。諱斯麻王。是琨支王之子。則末多王異母兄也。琨支向倭。時至筑紫嶋、生斯麻王。（中略）今案、嶋王是蓋鹵王之子也。末多王、是琨支王之子也。此曰異母兄。未詳也。　『日本書紀』武烈紀

（訳）四年（５０２年）、百済の末多王（牟大＝東城王）は無道にして百姓を暴虐す。国人は遂に除き、嶋王を立てる。是れ武寧王なり。（註）「百済新撰」に云う、末多王は無道にして百姓を暴虐す。国人は共に除く。武寧王立つ。諱を斯麻王（しまおう）という。是れ琨支王の子なり。

則ち末多王の異母の兄なり。琨支は倭に向かう。時に筑紫嶋に至り、斯麻王を生む。（中略）今案ずるに、嶋王はこれ蓋鹵王の子なり。末多王はこれ琨支王の子なり。これを異母の兄という。未だ詳（つまびらか）ならず。

蓋鹵王の子供を身ごもった婦人を昆支君に与えたという。生まれた子が武寧王である。したがって武寧王は昆支君の子ではなく、蓋鹵王の子であると書かれている。しかし「未詳也」としている。

武寧王が蓋鹵王の子であるとなれば、武寧王は北方夫餘の系統となり、王統はまた北方夫餘へ戻ることになる。

『梁書』によれば、武寧王は普通二年（５２１年）に梁王朝に朝貢している。「普通二年、王餘隆、始復遣使奉表」とある。王餘隆は武寧王である。始めて朝貢し、上表している。その時、「都督百済諸軍事寧東大将軍百済王」に任命されている。

近年、武寧王の墓が発見され墓誌が出土した。それには次のように書かれている。

寧東大将軍百済斯麻王。年六十二歳。癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩。（後略）　『武寧王墓誌』

（訳）寧東大将軍、百済の斯麻王。年六十二歳。癸卯年（５２３年）五月丙戌朔七日壬辰に崩ず。

墓誌には「寧東大将軍」と書かれている。『梁書』にも「寧東大将軍百済王」とある。『梁書』の記述と一致する。『梁書』は史実を正確に記録していることが証明された。

その『梁書』に、百済の王位は「慶死、子牟都立。都死、立子牟太」と書かれている。武寧王が朝貢しているにもかかわらず南方夫餘の王統が書かれている。それは武寧王が南方夫餘の系統だからであろう。

『紀』の武寧王の誕生記事を見ると、「其弟軍君（昆支也）」と書かれている。昆支を蓋鹵王の弟としている。昆支は蓋鹵王の弟ではなく叔父にあたる。明らかに誤りである。この点から見ても『紀』の武寧王の誕生記事は信頼できないことがわかる。

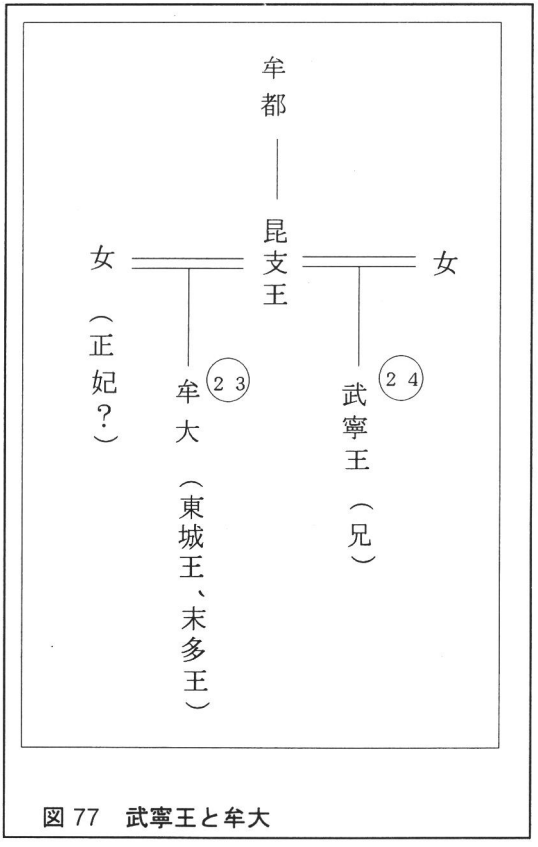

図 77　武寧王と牟大

史実はやはり次の記録であろう。

■汶洲王蓋鹵王母弟也。
（汶洲王（文周王）は蓋鹵王の母の弟なり）

■武寧王立。諱斯麻王。是琨支王之子。則末多王異母兄也。
（武寧王立つ。諱は斯麻王。是れ琨支王（昆支王）の子。則ち末多王（牟大）の異母兄なり）

武寧王は昆支の子であり、末多王（牟大＝東城王）の異母の兄である。牟都の孫であり、牟都の系統であるということになる。系図にすると「図 77　武寧王と牟大」のようになる。

弟の牟大の方が先に王位についている。牟大の母の方が正妃だったのであろう。

(6)　『隋書』と『旧唐書』の百済伝

『隋書』と『旧唐書』の百済伝の冒頭文は次のようになっている。

百済之先、出自高麗国。（中略）始立其国于帯方故地。　『隋書』
百済国、本亦扶餘之別種。嘗為馬韓故地。　『旧唐書』

『隋書』には、「百済の先は高句麗より出る」とある。百済は北方夫餘であると書かれている。「始め其の国を帯方の故地に立てる」とあるように、北方夫餘は帯方の故地に上陸して百済国を建国している。

『旧唐書』の方には、百済は「夫餘の別種なり」とある。別種とは北方夫餘ではないということであり、南方夫餘であることを述べている。「馬韓の故地に為る」とあるように南方夫餘は馬韓の月支国に建国している。

このように『隋書』百済伝は、百済のはじまりについて書き、『旧唐書』百済伝は、唐時代の百済王統について書いている。これを読み分けることが重要である。

百済最後の太子隆は「辰朝の人なり」と墓誌に書かれている。百済（南方夫餘）は呉の夫概から出ている。百済（南方夫餘）は呉から出た辰であるということになる。